

「小網代の森」に眠る特攻艇基地跡

数々の小鳥のさえずりやコゲラ(小型のキツツキ)の木をつつく音を聞きながら三浦市にある「小網代の森」をくぐり抜けたところ、小網代湾の海岸に面した崖に、ぽっかりと3つの洞窟が口を開いています。

今は静かなカニの楽園になっている小網代湾ですが、アジア・太平洋戦争末期には、アメリカ軍の本土上陸に備え、特攻艇「震洋」の出撃基地が作られていました。小網代湾周辺だけで大小十数本のトンネル(地下壕)が掘られ、現在でもその存在を確認することができます。湾に面した壕は比較的探検しやすいのですが、入り口まで潮が上がっていたり、内部に水たまりがあったりするので、探検する場合は、長靴・懐中電灯・軍手・帽子などは不可欠です。

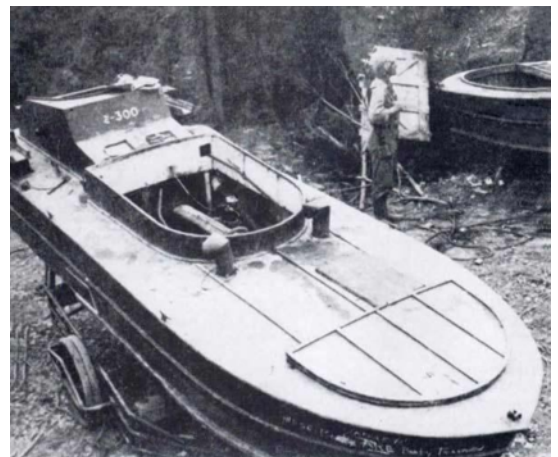
懐中電灯を片手に持って真っ暗な壕内におそろおそろ入ってみます。すると、天井には艇を収納するための滑車をかけた跡、床には艇を運んだレールの跡、壕の入り口には扉の跡など、当時の様子をしのばせるものがいくつも残っています。おまけにゲジゲジもたくさんいて、油断していると頭の上から突然落ちてきたりします。

ここ小網代に配備された第27震洋隊は、震洋艇25隻・搭乗員(特攻隊員)50名を含む総員184名の部隊で、相模湾内で演習をくり返していました。敗戦がまぢかに迫った1945年7月29日には「特別任務」(特攻)を受け、震洋艇3隻(搭乗員6名)が出撃しました。しかし、翌日、相模沖で米軍機の攻撃を受けて全員が戦死しています。

また、油壺マリンパークのある小さな半島をはさんだ一つとなりの油壺湾には、特攻用特殊潜航艇「海龍」の基地がおかれていました。現在は、多くのヨットやクルーザーがつながれていますが、当時は60隻の「海龍」が実戦配備されていたそうです。

南下浦町松輪の江奈湾には、第56震洋隊(震洋艇25隻・搭乗員53名を含む総員183名)が配備され、福泉寺に部隊本部が設置されました。搭乗員や基地部員は、民家に分宿していたそうです。江奈湾周辺にも約10本の地下壕が残されています。

キラキラ光る小網代湾や江奈湾を眺めながら、60年前の戦争に思いを馳せてみてはどうでしょうか。



注:「特攻」...太平洋戦争末期に日本軍が行った攻撃法。若い軍人が自ら操縦する航空機等で敵艦に体当たりすること。